

愛は、いつも  
哀しみをさらけだす……  
こころを灼いて  
恋は  
ふりむきながら  
去ってゆく



ルノー・ベルレー  
ナタリー・ドロン  
ロベール・オッセン  
《カラー作品》  
LA LECUN PARTICULIÈRE

# 個人教授

監督・ミシェル・ボワロン / 音楽・フランシス・レイ



東和提供 / カラー映画

7月1日〈土〉よりロードショー

みゆき座 (591)  
5357

大人の世界を知り求めた高校生と年上の女の恋……この古くて新しいテーマを扱ったものは数多いが、この映画もまた、きわめて現代的な背景の中に、青春そのものの姿を鮮やかに浮彫りにしている。

高校最上級生のオリビエが、横顔にうれいを含んだ年上の女フレデリクを知ったのはセーヌ河沿いの並木の葉が黄ばむころである。世間的に有名なレーサー、フォンタナの恋人という彼女は25才。もう何年も「愛人」の座に甘んじている女の陰影は若いオリビエに知らぬ慕情の火をともした。

フォンタナがインディ五〇〇のレースに出場するためアメリカへ発ったあと、ひとりパリにとり残されたフレデリクの不安な心のすき間に、そつしびこむ青年のひたすらは慕情……。その二人を決定的に近づけたのは、たまたま、共に過ごすことになったスキー場でのバカンスだった。

そして、二人にとって忘れられぬ夜となったホテルのパーティーの夜……。

その翌日、彼女は誰にも告げず、ひとりホテルを去ったのは、年上の女としての自尊心だったろうか。しかし、このことがかえってオリビエの心をいつそう燃えさせたことになった。

この奔流のような激情が、フォンタナとの恋の頼りなさに悩む女の心と身体を、やがてとかさぬはずがない。彼女の自尊心が淡雪のように消えたとき、二人はノートルダム寺院のみえる小さなホテルの一室で、スキー場の夜よりも、もっと激しくお互いを求めあうのだった。

二人の恋が世間の目にとたえとんにならずに自然に見えようと、こゝろに愛しあっている

カラー作品 映画 フランス映画

# 個人教授

ルノー・ベルレー/ナタリー・ドロン/ロベール・オッセン  
監督 ミシェル・ボワロン/音楽 フランシス・レイ

東和提供  
LA LEÇON PARTICULIÈRE



二人が別れて生きる理由は何もない……。もう二人の結びつきをさまたげるものは何もありません……と彼女は信じた。

フォンタナがパリに帰ってきたのは、そんな矢先のことだった。一途なオリビエの心は傷ついた。これで終りだ……オリビエは苦しみの中でそうつぶやいた。

再び両親の許に戻った彼は、苦悩を刻みこんだフォンタナから、フレデリクが姿を消したことを知らされた。そんなにも深く僕を愛しているのか……オリビエは今、はつきりとしたのだった。

ひたむきな慕情を燃やす高校生オリビエをこの映画で慧星のようにデビューし、一躍、ティーンを熱狂させ、その後「さらば夏の日」(哀愁のバリ)と今や人気絶頂のルノー・ベルレーが演じている。また年上の女フレデリクには、ナタリー・ドロンが扮し、感情豊かに最高の役づくりでヒロインを見事にこなしている。

二人の恋に影を投げかけるレーサーには、名優ロベール・オッセン。貫録十分な名演はさすがベテランと絶賛を浴びた。

監督は「お嬢さん/お手やわらかに」、「さらば夏の日」のミシェル・ボワロン。新人発掘には定評のある彼は、見事にベルレーのデビュー作を飾ったわけである。また、脚本は彼に常に協力しているクロード・ブリュレ、アネット・ワードマンが担当し、いかにもフランス映画らしいキメ細かなラブ・ストーリーに仕上げている。

さらに、全編に流れるリリックなメロディ「男と女」、「白い恋人たち」、「ある愛の詩」と映画音楽のヒット・メーカー・フランシス・レイの作曲である。

## この映画に寄せられたことば

■ひたむきな青春のすがたに涙  
年下の少年が年上の女に恋をします。おそらく最初の真剣な恋でしょう。その恋が決して実らないことを、私たちは知っています。でも彼は知らない。知らないで、やがて破れるはかない恋のために、いちずに燃え、よろこび、苦しみ、傷つきます。そのひたむきな若さが、いとしくいじらしい。それが青春のすがたです。そして青春への愛惜に私は涙をこぼします。オリビエに愛されたフレデリクが、まるで自分自身であったような錯覚にとらわれながら……。

(映画評論家) 雨 健子さん  
■自分のなかに(女)を発見した驚き  
この映画で、あなたは自分の中に(女)を発見してドキッとします。私がそうだったように。だってナタリー・ドロンの感情があまりにも私のそれに近く、ルノー・ベルレーの求愛は、そんな私をゆりうごかさずにはいなかったから……

(映画評論家) 林 冬子さん